

卷頭言一

人は意思しない何物にもなり得ない

桐野三郎

人生一度っきり。男一匹でっかく生きるのだ。世に出るときそんな気概は僕にもあった。百貨店に入社。七階建てのビルを見上げて「この社長になろう」と目標設定。人より余計に稼いで余計に楽しむために。定年を迎える頃には夜な夜な美女を侍らせ、自前のヨットの上で豪華なワインパーティーを楽しむぐらいの人生を生きなくっちゃ。

だがこの会社で社長は無理だと判るまで二十年以上かかった。ならば自分で会社を立ち上げるしかない。と四十五で独立。だがこれも社長気分を味わったのはちよんの間。後はご多分に洩れず放漫経営で資金繰りに四苦八苦。十六年かかって周囲に迷惑かけずに整理できたのはむしろめつけ物だったという自分の人生、つまりは己の無能を悟るのに四十年も費やしたという単なるドジ物語だ。

だが近頃になってふと思う。「いや、待てよ。俺の人生けっこう良い線いってるんじゃないか?」と。酒はワインなどより上質の芋焼酎に、つき合ってくれる美女たちも単に「元」という一字がつくだけ、場所もヨットなどより遥かに豪華な茅門邸あたりで、庵主をはじめとする錚々たるメンバーと差して呑んでいるのだ。フッフ。「人は意思しない何者にもなり得ない」と言ったのは萩原朔太郎だったっけ? さすがに言い得て妙だよな。だけどこれももちろん入院貞子さんとの幸運な出会いがあったからこそ。彼女はぼくの記憶の中に道祖神のようじ、いまでもあの微笑みを浮かべて立っている。